

「東北六魂祭」の絵の中に 震災復興の思いを込めて。 東北のみんなで心をあわせ すばらしい明日に。

あつぷる舎 えかき 絵描
おの でら じゅんいち
小野寺 純一氏

プロフィール

昭和22年1月16日生まれ。仙台市出身。血液型O型
仙台工業高校土木科を卒業後、建設会社に入社。6年間勤めた後、幼少の頃から抱いていた画家になる夢を実現すべく、退社。グラフィックデザイナーとして仕事をこなす傍ら、創作活動を開始し、仙台市内を中心に精力的に展覧会を開いて多くのファンを得る。そんな小野寺氏の好きな言葉は「スマイル」。大好きなチャーリー・チャップリンの名作映画『モダン・タイムス』の最後のセリフでもある。



鎌田会頭の依頼を受けて 制作に取り組んだ「記念絵画」

今回、描かれた東北六魂祭の絵に込められた思いをお聞かせいただけますか。

左のイラストは昨年11月に勇退された日本商工会議所の岡村会頭へ東北六魂祭の会議所の皆さんがプレゼンした記念の絵画なんです。震災復興に尽力された岡村会頭自身も思い入れの深い「東北六魂祭」をテーマに作品を描いて欲しいとオーダーを受けました。

JRが国鉄時代に展開したディスプレイ・ジャパンのキャンペーンで、取材ライターとして東北各地を訪ね歩いた経験から、それぞれのまちの雰囲気はもちろん、お祭りについても知っていました。個人的には青森県のねぶた祭りが好きですし、思い入れもあるのですが、この絵では福島県の「わらじ祭り」を中央の一番手前に大きく配することで、「これからも負けないで」というメッセージを込めたつもりです。

東日本大震災では、福島に限らず、多くの人たちが大変な思いをされました。そして未だ困難の中にいる方々もたくさんいらっしゃいます。そんな中であって、原発などの課題を抱える福島は、やはり特別だと思っております。ですから、わらじ祭りを中心にして、その回りを他の東北の祭りが取り囲む絵を描くことで、みんなで手をつな

ぎ、支え合おうという想いを表しました。六魂祭とは本来、そういう祭りでしょう。ですから、今後東北六魂祭実行委員会が制作される関連グッズに、私が描いたこの絵を自由に使っていただき役立ててくださいと申し出ました。

画風を確立した 水性アクリル絵の具

画家を目指すきっかけは、どんなことだったのですか。

小学1年の時、授業で担任の先生の顔を描きましたね。「小野寺君、上手だね」と、褒められたのが最初です。元々絵が好きでしたから、校内に貼り出されたものとても嬉しかったのです。

中学に入り、応援団や剣道部でも活動したのですが、「何か違う」と思い、美術部に入りました。ここで油絵具と出会ったのですが、学校の部活を離れると、好んで描いていたのは「劇画」でした（笑）。当時、劇画タッチの漫画がとても流行していましたね。インクと、ペン先が軟らかくて線に強弱がつけやすいGペンを使って、よく地元の長町駅構内などを描いていました。

高校卒業後、建設会社に就職したのですが、6年間勤めたところで一念発起、絵描になるために会社を辞めました。ただ、絵だけでは食べていけませんので、グラフィックデザイナーとして独り立ちしたのです。

—現在の画風を確立されたのは、いつ頃ですか。

独立してすぐに、大手印刷会社から仕事をいただくことができました。

この頃、グラフィックの仕事の傍ら、棟方志功さんや川上澄生さんの作品に刺激を受け、木版画を始めたのです。たくさん刷って、いろいろな所に飛び込みで持ち込み、買ってもらったんです。そうこうしているうちに、世の中はパソコンの時代に突入。グラフィックデザイナーの仕事にもコンピュータが入り込み、アナログ人間の私は、これを機会に本業を絵一本に絞ることを決意したんです。

その頃、発色がよく、油絵具と違って乾きが早いので大変扱いやすい水性アクリル絵具が、日本のイラストレーターや画家たちにも使われるようになってきました。「この絵具でヒ



—これまで、どのような創作活動を行ってこられたのですか。

最近では、秋に藤崎さんで個展を開きましたし、年明けからは清月記さんの一番町にあるライフスタイル・コンシェルジュで、私の絵を見てもら

ロ・ヤマガタさんのような絵を描いてみよう。谷内六郎さんのような絵なら自分にも描けそうだ」と、版画を一旦休止し、絵描に戻りました。この水性アクリル絵具との出会いが、現在の画風を生み出したと言ってもよいと思います。それからは新作を描いては、キー屋さんや銀行などにお願ひし、2カ月に1度の割合で展覧会をさせていただく日々が続きました。徐々に「ファンです」と言ってくださる方が増え、企業からも声がかかり始めて、絵一本で生計が立てられるようになったのです。

ライター業から ジオラマ制作まで

—今後、抱負をお聞かせください。

いながら、そこに描かれたモノや風景、暮らし、遊びについてお話をさせていただけを開催する予定です。過去には、『ぼくらのマッチ箱電車』という絵本を描いたり、ファッションビルに飾るクリスマススのジオラマを作ったこともありました。

人が集まり、話すことで 力が湧いてくる絵を

—今後の抱負をお聞かせください。

私の絵は、私が少年だった昭和30年代の風景を題材にしたものが多いのですが、いま、仙台市が開いている「老壮大学」で、絵を見ていただきながら、当時の仙台の様子をお話しする会の講師をさせていただいています。参加者の皆さんは、懐かしさに涙を流して喜んでくださるんですよ。

これからも2カ月に1回くらいのペースで展覧会を開きながら、私の絵を囲んでおじいちゃんや青年時代、息子さんの子ども時代、お孫さんの今を語り合っていたら、嬉しそうですね。

実は、私は未だ震災を絵で表現することができません。ですが、震災前の風景を描くことで「昔はこうだったね」と、絵を囲んで皆さんがあれこれと話し、懐かしみ、心を通わせて、「いろいろあるけれど、がんばっていきましょう」という力にしてもらえようかな、そんな絵を、心を込めて描いていきたいと思っています。

『森』は生きています。人間と共に。



二酸化炭素を酸素に。人間にとって欠かせない酸素を、人間が吐き出した二酸化炭素から作り出す植物たち。この自然のサイクルを、一本の木を、そして森全体を、見守っていかなくては……。そう私たちは考えています。私たちは青葉環境保全です。

— より良い環境をめざす —
AOBA 青葉環境保全
本社/仙台市若林区蒲町19-1 電話(022)286-3161(代)